

わかりやすい展示を考える

—— 反応調査とシナリオから ——

嶋田 忠一*

はじめに

当館では、開館以来、「わかりやすい展示」を念頭に展示活動を行ってきた。しかし、その間、わかりやすい展示というのはどんな展示なのか、どういう手続きや方法による展示なのか、単なる命題なのか、機能面をいうのか、理論面をいうのか等々の十分な検討を経ずに今日に至っているのではないだろうか。開館10周年の節目を迎えた今日、これまでの成果を踏まえ、「わかりやすい展示」に対する、当館なりの認識を深めることが課題であると考え。そうした観点にたつたとき、

- 総合博物館である当館の専門部門（美術・工芸・歴史・考古・民俗・地質・生物）、それぞれの独自性は尊重されるべきであるが、調査研究をいかに展示に反映させるかの段階をも無制限に独自性が約束されているのではないように思う。
- 「わかりやすい展示」に応える前に、当館の展示（何を、如何に行うか）の構造的認識や論理性を一般化する必要があると思う。
- 展示に関しての、「わかりやすい」「わかりにくい」というのは、展示する側の意図が展示という表現方法をとおして、見る側にどの程度認知されたかということであり、それをはかるには、見る側の反応を把握するというプロセスが必要である。従って、展示活動の中に、反応を把握するというプロセスを位置づけ、それにともなる検討によって評価し、さらに後の展示活動に生かしていくことが望ましいといえよう。

本編は、上記のような私見をもとに、反応調査からみた展示の論理性を検討するとともに、シナリオを中心とした事前のチェック方法を考えるものである。

Iでは、来館者の反応調査の結果をどうみるか、その結果とシナリオとの間に因果関係があることを述べる。

IIでは、シナリオを作製する際の要点とわかりやすいシナリオにするためのチェックをどう考えるべきかを述べる。

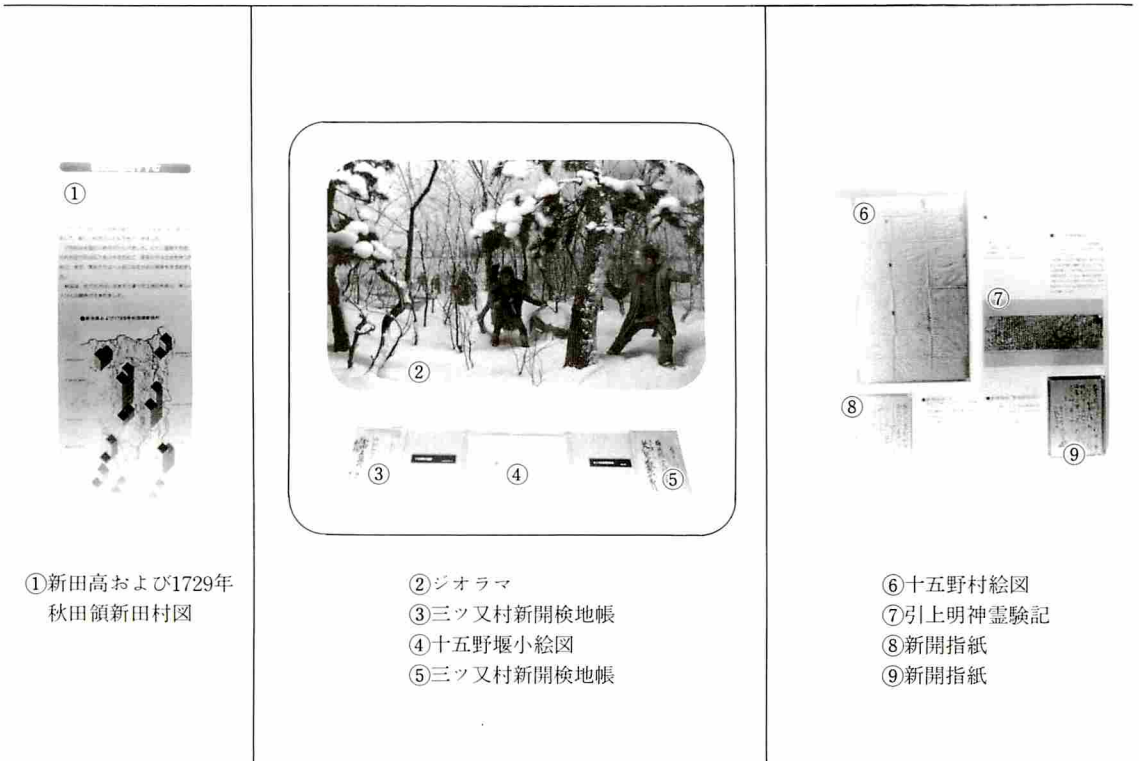
I 反応調査とシナリオ

昭和56年度から、当館では、博物館学的研究の一環として反応調査を行ってきた。ここでは、そのうちの昭和58年分の第一展示室（近世から昭和30年代までの13コーナー）の1事例をもとに検討してみる。なお、このときの反応調査は面接法により、以下の課題からなっていた。

- ① 解説員による解説がなくても、展示意図や視点が理解できるか。
- ② 解説員による解説があれば、それらがわかるか。
- ③ 展示意図や視点がわかるためには、何か欠けていないか。

ここで利用した原調査票はまとめて後掲したので参照していただきたい。概して、①では、展示意図や視点からずれた、来館者の反応を拾いあげることができ、②では、解説員による解説という、補助手段の有効性をみることができた。③では、専門的な指摘や意見が特筆されよう。調査票の総合的な分析やその活用については後の機会に譲ることとし、展示意図と反応との間のギャップの大きい①を当面の問題とする。来館者の全てに解説員が付き添うわけではなく、むしろ、少ないといえるのである。そうだとすれば、誤解を解く機会はまずないだろう。そのためにも、①の中から特に誤解のはなはだしいコーナーを選び、その構造上の

*秋田県立博物館



①新田高および1729年
秋田領新田村図

②ジオラマ
③三ツ又村新開検地帳
④十五野堰小絵図
⑤三ツ又村新開検地帳

⑥十五野村絵図
⑦引上明神霊験記
⑧新開指紙
⑨新開指紙

特質をつかむ必要があると思う。ここに掲げたのは〔新田の開発すすむ〕である。

◎〔新田の開発すすむ〕

このコーナーは、秋田の近世の冒頭に位置し、挿図の如き配置となっている。

これを見た来館者の認識（Aに相当する、何がわかるか、という発問）をパターン化してみると次のようになる。

他 観	<ul style="list-style-type: none"> ・マタギが狩りをしていることがわかる。 ・開発をするために木を伐っているところがある。 ・冬に木を伐っていることがわかる。 ・秋田では、冬に開墾をしたことがわかる。
自 観	<ul style="list-style-type: none"> ・古文書はわからない。 ・開墾の様子がよくわかる。 ・「佐竹氏が入る前と違った土地の利用と新しい人びとの関係が生まれました。」という意味がわからない。

- ・解説文を読むと、江戸時代になって、いかに開発に力を注いだかがわかる。
- ・解説文では用水路のことがわかりにくい。

他観は、あるがままに「観る」、あるいは「観せられている」と想定されるパターンで、このコーナーでは100%ジオラマを「観」ている。そして、そのジオラマがどんな設定に基づくものであるかを「観る」例は無いに等しい。一方自観は、あるがままに「観る」に止まらず、資料間の脈絡や因果関係などを自力で「観る」もので、ここでは、解説文が自観の鍵となっている。また、前者は、展示する側の「観せる」意図とは大分かけ離れた見方を表わし、後者も、展示の視点には到達していないものと判断されよう。こうした反応のあらましをどう検証し、そこから何を学びとることができるだろうか。まず展示をうみ出したシナリオに立ち返ってみる必要があるだろう。そのまえに、認識パターン他観（他力観想）・自観（自力観想）、また後掲の体験観について述べておく。前二者は仏教用語の借用^(註1)である。他観は、提示されたもの（展示資料）に対する一義的な知覚をいい、自観は、提示されたもの自体

にこだわらず、自分はこうみるのだという理解度をいう。体験観は、筆者の造語で、みるものの生活体験・知識に照らして、みようという段階である。あるものがあるがままに観る行為から実生活の中で受けとめ、自分はこう観るという図式である。

他 観	→	体 験 観	→	自 観
美しい、派手だ		以前作った		そうだったのか
よくできている		見たことがある		なるほど
よく残っていた		聞いた		こんな筈はない
汚ない		昔はこうだった		こうあるべきだ
気持ちが悪い		知っているもの		なるほど
こんな場面だ		とちがう		納得した
何だろう		知らない		

このような把握のしかたの是非については、大方の御叱正を充分予測している。ともあれ、こういう操作をしたことをお断りしたうえで、次に展示の前提となったシナリオを検討する。シナリオ^(註2)は以下の文脈からなっている。

A 秋田藩近世体制の確立を17世紀後半と判断し、一つの柱として近世前期新田開発の終了時を考えている。—1729(享保14)年には、本田高約20万石に対して本田および新田が18万6千石であり、新田率は48%である。—新田村は、秋田藩の村総数およそ800か村のうち100か村あり、幹線河川周辺に分布する。—秋田藩新田は、幹線河川から引水する水田を中心にして形成された。⇒以上がジオラマの左方

B 秋田藩での用水路開削としては、八郎潟東部の馬場目川から引水する真崎堰、戸村堰がある。—また米代川から引水し、二ツ井を開発した「岩堰用水」があげられる。—この時期の新田開発は、「先進技術」の結果としての水田達成にあった。

C 視点としては、そのような「先進技術」や家老クラスの指導者を直接取り上げなかった。なぜなら農民の自然に対する構え方を中心課題としたから。

D 秋田藩では、新開指紙(開発許可状)をもつことによって開発の権利が生ずる。—受給者の多くは家臣であった。—ここでは、この一例として、檜山(能代市)の所預り多賀谷家の家臣で平鹿郡与作村(十文字町)の創始者与作の子御鹿縫殿之介が1651(慶安4)年に指紙を受け、1712(正徳2)年に、小松七左衛門の代になって、十五野堰開削に着手したこ

とをとりあげている。⇒下方、右側に実資料として。E しかし、十五野開削の中心人物は、伝承によれば、この堰の上流に位置する新古内村(十文字町)の治兵衛である。

F ジオラマの場面は、途中まで開削した十五野堰が高低差が不明となり、流水せすに苦心していた晩に、治兵衛が夢の中で神狐を見て、駆けつけ、狐の足跡を発見して喜ぶ姿である。—その足跡をたどって開削したら流水し、水田の達成を果すことができた。—その後、神狐が立ち止まった場所に引上明神を建てて、現在に至っている。

G このような伝承は、京政府(稲川町)の麻生与惣右衛門が、皆瀬川から引水に成功した与惣右衛門堰にもある。—測量技術の未熟な当時の用水路開削の困難さを物語るものである。

以上のようなシナリオが展示にどう生かされたかを検証するために、展示資料が、シナリオのどの文脈を反映して展示されたものかを以下に掲げた。

①～⑨は展示資料である。

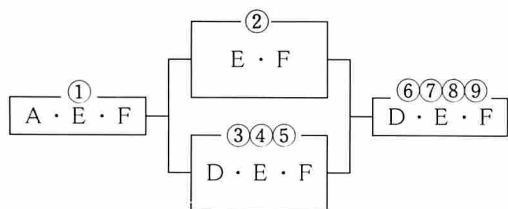
- ① E, F, A
- ② E, F
- ③ D (新田開発の図式的認識。差紙→開発→知行地→登録=新開検地のうちの新開検地帳。但し、E, Fとは村を異にする。)
- ④ E, F (補強的資料)
- ⑤ D (③に同じ)
- ⑥ E, F (④に同じ)
- ⑦ F (④に同じ)
- ⑧ D (③のうちの指紙), E (補強的資料)
- ⑨ D (③に同じ。但し村が異なる)

また、シナリオの文脈でみる限り、視点は先進技術によらぬ庶民自らの新田開発の状況を十五野新田村を提示することによって達成しようというところにあるが、当の十五野新田村に関わる資料と他のものを分類してみた。

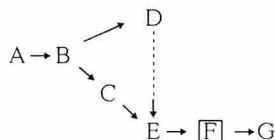
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	文脈
県内の一般的事象	○									A
十五野新田村	○	○	○	○	○	○	○	○	○	D E F
他地域		○	○				○			D

シナリオの展示に対する充足度からすれば、文脈の

B, Cに対応するものが欠けていることがわかる。とともに、欠けたB, Cが実は、十五野新田村に話題が及ぶうえで必要不可欠の前提となるべき知識のように思われるのである。さらに、十五野新田村の状況が納得できたとして、文脈Gの如き他に置き換えのきく、事象の広がりをも示すべきではなかったのかという感想を抱く。現状の資料の、配置とシナリオ上の役割は次のように示せる。



シナリオをネットワーク^(註3)式に改めてみたのが下図である。



ジオラマFはEが提示されていないと提示できない。同様に、CはBが提示されていないと提示できない。DもCに同じであるが、E・F・Gは、Dが提示されなくても、Cが提示されることによって提示できる。実線の矢印は必然性の行方を意味し、点線矢印はダミーと呼ばれ、意味のない行方を意味する。すなわち、Dの役割をもって展示された資料③⑤⑧⑨は、A→B→C→E→F→Gの流れとは異質な流れにのっていることになる。このように、「新田の開発すすむ」は、展示を規定する視点とは相容れない要素Dが加わる複線構造を示すために、いわゆる「わかりにくい」展示となっているのである。そのうえ、反応調査の他観にみる如く、ジオラマが必要以上の機能を発揮したことも原因となろう。「新田の開発すすむ」という、近世初期の歴史的事象を扱いながら、その中に、伝説という次元の異なる事象を加えることは、また別の複線構造につながるのである。

- 以上のことがらは次のようにまとめることができる。
- 来館者の反応を調査することは、わかりやすい展示を追求する際の方法となりうる。
 - その方法というのは、シナリオと展示資料の相関関

係を明らかにし、反応調査の結果とつき合わせてみることである。

- わかりやすい展示は、シナリオの論理性いかに関わっている。
- シナリオと展示資料との関係は、事前に検討できる。

Ⅱ シナリオから展示へ

前章では、観る側によって惹起される「わかる」「わからない」の遠因は、遡ってシナリオやシナリオから展示に至る過程に求められることを述べた。そこでは特定の事象につきまとう、さまざまな要素にひきずられ、焦点をしぼりきれないといううらみがあった。

ここでは、前章の帰納的結果を参考にして、どうすることが「わかりやすい展示」に近づく方法であるのかを検討する。

1. 資料

資料という呼称は、博物館における専門性あるいは学術性を基礎とする価値判断を伴うモノ（物）自体である。とともに、それは、モノとしての形以上に、目には見えない存在意義などの多面的機能を内包してい



ササゲラ

る。たとえば、ここに、民俗資料ササゲラがある。これを次のように表現した。^(註4)

名まえのとおり、身近にあるササの葉を用いたケラである。ケラは、背負い運搬用であると共に雨具でもあるが、ササゲラは、荷ずれ痛みするため雨具として用いられたようである。

ササの新葉が2～3枚出そろった頃に採取し、熱湯に入れて、手早く取り出す。それを陰干しにして、ゆっくり乾燥させ材料とする。このササを編み上げる材料がクゴと呼ばれる植物で、撚り紐をつくりながら、これにササを綴じていくというやりかたをする。ササを綴じていく際は、ササの裏面が表になるようにする。こうすることにより、葉脈にそって雨が流れるという仕組みである。クゴもササも材質的には他のものよりもはるかに軽い特性もっている。このケラに使われたササの葉は284枚、クゴの撚り糸は上下8段である。

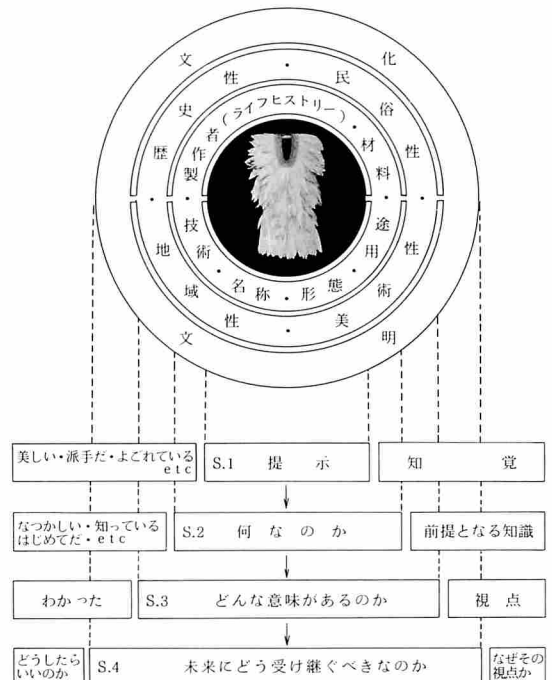
目下、県内では、この石岡氏以外に製作者が見当らず、また、伝播経路もはっきりしない状況である。昭和50年に製作してもらった資料であるが、この時既に製作をやめてから20数年になるということであった。

石岡氏が製作方法を教わったのは、海岸沿いの峰浜村出身の奉公人仲間からのようだが、それにしても峰浜村周辺から類似資料が見つかっていない。ササを湯通しする際は塩を入れた方がよいとのことであるが、あるいは海岸沿いで海水を利用した湯通し方法の名残りであるのかも知れない。

これだけで、こと足りたわけではない。製作者のライフストーリーや技術伝承、製作方法、材料採集地の植生、材料の地方名や採取法、名称及び形態の地域性等々各局面での深め方が予想される。さらに、現代生活とどう関わりをもつのか、後世に残すべきものなのか、残すとしたなら、資料の多面的性格のどの部分をどんな方法で残すべきなのか、といったことがらにも至らざるを得ないのである。単に、上記のように表現上の過不足のみにとどまらず、モノの多面的性格・機能のことごとくを考え、深化させてゆける可能性を含んでいるのである。右図の同心円はそうした可能性に立脚した深化パターンである。そして、それに対応するように、「観せる」パターン、S (stage) を想定し

てみた。S 1は、提示するという段階。一体、提示されたものが何なのか、観るものの教養とか常識とか生活体験などによる不確実な認識レベルである。これはモノを提示はしているが、観かたを深めるうえでは何もしていないに等しい。ただし、モノの提示なくしてはモノを語ることはできない。以下、S 2はモノの実体をいう段階、S 3はモノの意義づけ(多面的な機能)をいう段階、S 4はモノと我われとの関係(未来思考)をいう段階となる。つまり、S 1で知覚し、S 2で実体がわかり、S 3で存在意義がわかり、S 4ではモノや考え方のおきかえによる広がりがわかる、という認識のレベルである。あくまで、ひとつのモノに限っての深化であり、それに対応する反応レベルでもある。

上記のようなことは、モノひとつひとつについて言える。しかし、展示資料としてのモノは、必ずしも深化パターンの全貌を明らかにして観せるものではない。なぜなら、個々のモノ、資料としてのモノの深化の一部を強調することによって、観せる側の視点や意図(結果的にはシナリオ)を完結させようとするのであるから。その意味では、シナリオによって選ばれたモノと



いえるかも知れない。当館でのテーマ展示は概ね、そのようにして展示されたものといえよう。

ところで、ケラならケラ、仮面なら仮面を一堂に集め、そのヴァリエーションや機能のことごとくを観てもらうために展示することもある。いわゆる分類展示における資料はモノのまとまりと其中での異同が観る者の個人差に応じて読み取れる点で、視認性が強い。当館でいうところのテーマ展示における資料は、ある事象に関わる要素の中から焦点をしばり、視点を設定し、考え方の有効性を読み取ってもらう点で、選択性が強い。分類展示はモノを基礎にしたシナリオから生み出される展示であり、テーマ展示はシナリオを基礎にしたモノの展示である。そして、極端なことを言うと、前者では、隣りあう資料間に本質的な差はないが、後者ではそれがある。たとえば、民俗資料であるケラの隣りに、歴史資料である古絵図があるというふうにともあれ、ここでは、当館の一般的な展示形態であるテーマ展示を念頭にしているので、以下では現実的な課題について述べる。

2. シナリオの必要性

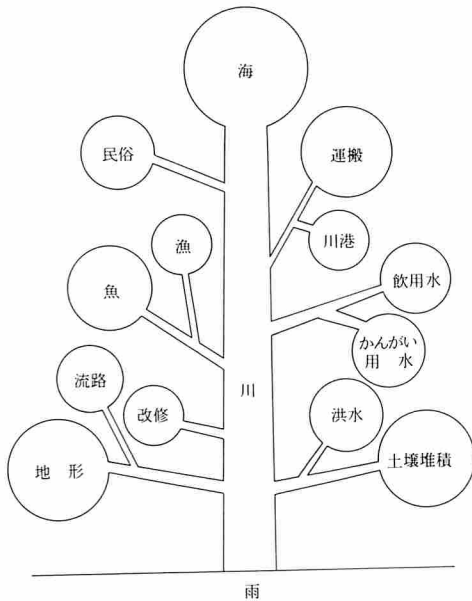
当館では開館以来、展示するにはシナリオが是非必要であるとされてきた。それは、郷土学（秋田学）と称し、既存の学問や研究方法に頼ることなく、隣接諸科学（当館の七部門）の総合などにより、その都度視点を新たに設定し続けることによって体系づけられるという研究の方法論に立脚するためにほかならない。視点の新鮮さは、ともすれば独善に陥り易く、一般化には無理がある場合もある。そのため、展示に至る前に十分に客観的、一般的（わかり易く）なチェック機能を荷っているのである。従って、単なる手続きとして、シナリオが重要視されたのではない。10年を迎えた今日、どんな機能を有しているのか。筆者は、またもうひとつの機能があることを指摘する。それは、第1章でみたように、展示終了後の処理、達成度あるいは展示目的到達度を検証できるということである。

3. シナリオのありかた

さて、その重要なシナリオをどう見るべきかということである。シナリオも本質的には、調査、研究結果の叙述であるが、論文ではない。専門的な術語がちりばめられているシナリオは、再考に値する。むずかしいことがらをいかにわかりやすく叙述するか、という

ことが先決であろう。わかりやすくの基準として、誰に、何を言うか、がある。その基準こそ、調査・研究結果のさまざまなひろがり（論文や博物館教室、資料収集、展示、巡回展etc）にもつながるといえよう。いずれにしろ、誰に、何を言いたいのか、そのためにはどの程度の叙述が適当かを把握する必要がある。誰に（対象）何を言うのか（目的）が明確に規定され、それによって前者では前提となるべき知識、後者では視点およびなぜその視点が必要なかが述べられているべきと考えるのである。つまり、叙述要素として、前提→視点→展開（視点の必然性）→視点のひろがり、を掲げることができる。ここでは、分析批評を採用することができる。なお、その展開部分は、シナリオの大半を占め、狭義の展示そのものである。そして、視点をいかに具体化させるかの論拠でもあるから、視点に直結する妥当な、論理的な述べかたがされていなければならない。さらに、起承転結やいつ・どこで・誰が・何を・どうした、といった文章作製上の言いふるされた要素が必要である。それに見合ったように、モノが選択されるわけであるから、抽象的な概念ではなく、より具体的な言いまわしが期待される。それなくしては、一担当の心づもりや一部門担当者の使い勝手な術語に終止し、わかりやすさを求める検討作業がついに形骸的なものになってしまうのである。そのような観点にたち、これまでのシナリオと称してきたものを見直してみるべきである。その中には、〇〇論をふりかざし、術語のオンパレードがあったり、視点が多岐にわたる複雑構造があったりするに違いない。

特定事象にまつわる要素を把握するとき、俗に、系統樹に見立てることがある。たとえば、川。枝葉は、それぞれ、川を観る視点につながる。それらを全て展示できれば理想的といえる。来館者が歩く床は全て川であり、どの展示室も川との深い結びつき、川なくしては考えられないことがらである。展示室の構造は、いわゆるプラザタイプが相応しいだろう。ところが、当館でのテーマ展示室は、四角い一方向の展示の流れしかできない。リニアタイプの展示室である。そこでは、川にすむ魚→川と人との関わり→川が文化にもたらしたもの、等々と一方向に流れるだろう。この矢印は、前章でいったように必然性・論理的展開をまずとした。前置の要素と後置の間に、必然性があるのだら



うか。川にすむ魚は一旦、川という太い幹に戻り、その上で、再度、その他の要素に入っていくはずで、さまざまな要素を次々と並置していく方法とは異なる。そのようなことから、当館でのテーマ展示ではさまざまな要素から選択した要素で、視点を構成すべきと考える。そして、小テーマと小テーマとの間に必然性があることも必要であろう。

シナリオは、単なる御題目ではない。モノを選択しモノの機能を固定し、モノとモノとの関係を示し、スムーズな論理を展開するものである。

4. 逆シナリオ

わかりやすい展示をするには、上記のようにシナリオのわかりやすさが先決であるが、観るものの反応も充分考慮しなければならない。それをいかなる方法ですべきか。前述の如く、シナリオはモノの機能を固定するものであるが、観るものも固定された機能として観てほしいという願望に支えられていると言えよう。しかし、実際には、モノの機能のさまざまな面を観ている。そこで、わかりやすいシナリオから導き出されたモノによって予想される、シナリオを否定する他の可能性を、逆シナリオの形式で練ることが考えられる。もしかしたら、こう観るのが一般的ではないのだろうか、とか、このような反応が起こるかも知れない、といったことがらを掲げ、否定的な側面を解消する段階

をつけ加えるのである。実は、当館の展示検討会議での発言は、逆シナリオの性格をもっていると考えている。これをはっきりと逆シナリオとして叙述することが、さらにシナリオをわかりやすくする道ではないだろうか。いずれにしろ、わかりやすい展示は、モノを仲介役として、観る側が展示する側の意図やシナリオを理解できるかどうかに関わるものであり、展示する側が観る側の立場を忘れては成り立たないものであると考えるのである。

おわりに

拙考は、「わかりやすい展示」の原点はシナリオにあることを、充分熟さないまま述べたものであり、この方面の研究者の成果も省みず述べたものである。その点は大方の御叱正を甘受する。

最後に、拙考は、渡部 辰・高橋一郎・庄内昭男各氏の御援助の賜物であることを述べて感謝申し上げます。

註

1. 当麻曼陀羅と呼ばれる、観経浄土変相がある。中央に阿弥陀如来が説教する極楽浄土を配し、向って左辺（序分義）の下から上へと、我が子・阿闍世に殺されかけた韋提希夫人の憂いや苦悩の図、それらのない世界の説明を釈尊に求める図など釈尊によって観せられている部分。向って右辺（定善義）の上から下へは、釈尊の力を借りずに仏国土を観る方法を教える部分となっている。そして、自力観想を深めた末に、阿弥陀浄土に到着するというものである。
2. 石田尚豊著・『曼荼羅のみかた—パターン認識』に拠れば、序分義を「観せる観想(他力観想)」・定善義を「観る観想(自力観想)」というふうに観想をパターン化して把握する。
3. 国安 寛著・『歴史学と展示の谷間に立って』（『秋田県立博物館研究報告No.1』1976・P37-41）第1章・新田の開発すすむ（ジオラマ）①藩政期農民の開拓観—非近代としての一、を著者にお断りし、パラグラフごとにとりあげた。
3. 加藤昭吉著・『計画の科学—どこでも使えるPERT・CPM』、『計画の科学Ⅱ—大規模化時代の新しい考え方と手法—』に拠る。

ネットワークの描き方には、いくつかの型とルールがある。そのうち、ルールは次のように表現されている。

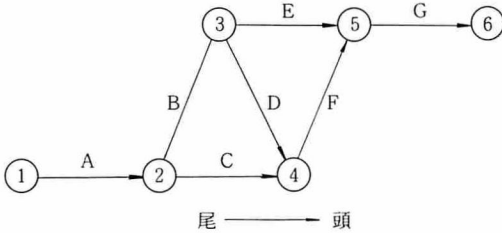
（上記前著P28-39）

①アクティビティ開始時点の制約

下図の意味するところは、まず、作業Aが始まり、Aが終るとB・Cを始めることができ、Bが終るとD・E

を、C・Dが終るとFを、E・Fが終るとGを始めることができる、といった各作業間の相互関係表示である。

アクティビティとイベントの関係



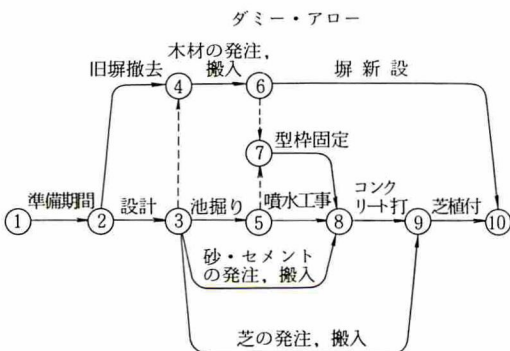
このような関係は、矢線が作業を表わし、マルが作業と作業との結合点になっていて、マルに入って来る矢線(作業)が全部終了したあとでないと、マルから出ていく矢線(作業)が開始できない関係にあると表現できる。

次に、このようなネットワーク表示で使われる矢線であるが、これは一般にアクティビティ(activity)とよばれ、作業活動、物品入手期間など時間を必要とする一連の活動をさす。また矢線の先端は頭、反対の端は尾とよばれ、頭の方がアクティビティの終りを、尾の方がアクティビティの始めを意味している。いうまでもなく、ベクトルとは異なるから矢線の長さは作業に要する時間とは無関係であり、単に作業の進んでいく方向を示すにすぎない。

一方、マルに番号の入った印はイベント(event)とよばれ、イベントに入って来る矢線でいうと、そのアクティビティが終了する時点と、また出ていく矢線でいうとそのアクティビティが開始される時点を表わす。しかしここで重要なことは、各アクティビティは、それを示す矢線の尾が接するイベントに入って来る先行アクティビティ群が、全部終了したあとでないと着手することができない、という約束で、このような図が描かれることである。

②疑似矢線(ダミー・アロー)の設定

下図(3-4)の矢線は点線で描かれ、作業名が入っていないことに気付く。このような表示をとった矢線は



所要時間ゼロの疑似作業、で単にアクティビティの相互関係を表示するために使われ、ダミー(dummy)とよばれる。このダミーはネットワークを描く上で重要な働きをすることになる。

③同一イベントからの矢線の数の制限

このルールは、イベントに入って来る矢線は何本になってもさしつかえないが、同一イベントから入って来る矢線は一本に限定する、というルールである。

4. 『秋田県立博物館・10年のあゆみ』(1984, P90)

参考文献

佐伯 胖, 1983 『子どもと教育を考える3・「わかる」ということの意味』

参考資料

※第一展示室 来館者反応調査

〔新田の開発すすむ〕

①湯沢市・女・20・学生

A. 新田の開発をするため木を切っているところ。右側の地図のあたりはだいたいどの場所かわかる。ジオラマの山は鳥海山かな…。

B. 理解できた

C. 川が絵の奥の方にあるので用水路を引こうとしているイメージが弱い。(人形の方に目がいってしまうので。)

②矢島町・女・30・主婦

A. 新田の開発をしている様子を表わしているのはわかった。しかし説明を見なければマタギが狩りをしている所かと思う。

B. 理解できた。場面もここだったら平鹿地方というように、しっかり設定されているのに感心した。

③角館町・男・30・農業

A. 狩りをしているところか? (右側の文書) 昔の人は字が達筆で読みにくい。)

B. 理解できた。伝説は面白かった。(伝説は何かの真実を伝えているものだろう。)

C. 解説を聞くときよくわかるが、絵(ジオラマ)だけでは冬の色というイメージしか残らない。

④湯沢市・男・40・会社員

A. 昔の開墾の様子がよくわかる。説明板の「佐竹氏が入る前と違った土地の利用と新しい人々の関係が生まれました。」という説明はわかりにくい。

B. 理解できた。

C. 説明を聞かない前は狐の足跡と用水路のことがびんときななかった。

⑤能代市・女・40・主婦

A. 木を切っている所。古文書はほとんど読めない。

B. 話を聞いてよくわかった。伝説は大変面白い。

C. 解説文を読むとわかるが、読まないただ冬の景色というだけしかわからない。案内をしてもらわないとただ漠然と見てしまう。

⑥秋田市・男・40・会社員

わかりやすい展示を考える

- A. 冬の場面。木を切っているところ。(説明板を見て新田を作っているところか。いつの時なのか?)
- B. 解説を聞いてわかった。(江戸時代に百姓も侍も新田を作るのがんばったんだな。)
- C. 時代がいつなのかよくわからない。(人形だけで江戸時代をあらわすのはむずかしいと説明した。)

⑦秋田市・男・50・団体職員

- A. 冬に山に木を切りにいっている。
- B. 理解できた。
- C. 冬の季節というだけで説明を見たり案内をしてもらったりしなければ新田をつくらうとしている所だということがびんときない。特に狐の足跡はよほど気をつけなければわからない。(雪の上だから仕方ないかもしれないが。)説明を一つ一つ読んでいると良いのだけれど、時間がないと説明を読むのがめんどう。

⑧秋田市土崎・男・60・元教員

- A. 新田を開発しているところ。
- B. できた。(土崎でも用水がうまく流れず、その跡が道路になっている。)
- C. どういうところが不足かよくわからないが、解説を聞かないと用水を引こうとしているところだとピンときない。

⑨青梅市・男・20・学生

- A. 新田の開発をする所。秋田では開墾は冬にやったものなのか?冬景色が素晴らしい。開墾で苦労したことがよくわかった。(説明文を読んで)
- B. 理解できた。
- C. 解説員が案内してくれる場合はいいが、そうでない場合は解説するテープを流したらわかりやすいのではない

か。

⑩岩手県・男・40・教員

- A. 冬に新田の開発をしているところ。説明板を読んで、秋田で江戸時代になってからいかに開発に力を入れたかがわかった。
- B. 理解できた。ずいぶん人手をかけて開発をしているんですね。前にもこの博物館に来たことがあるが、このようなドラマチックな話を表わしているとは案内してもらってはじめてわかった。
- C. 特になし。

⑪富山県・男・50・会社員

- A. マタギが狩りをしているところかな?(説明板を読んだから)新田を作っているところか。冬にこうしたことをしたものののだろうか。
- B. 理解できた。狐が用水路を教えるなんて面白い伝説があるものだ。ずいぶん江戸時代になって新田を開拓したのがわかった。
- C. 新田の開発と冬景色とがイメージとしてつながらなかった。説明を聞き狐の足跡を見て納得したが。

⑫大阪・男・50

- A. 説明文では用水路のことがわかりにくい。
- B. 理解できた。
- C. なぜ新田の開発をさせたのか。(佐竹氏が税を取るためetc,その結果どのようになったかをもっと具体的に背景などを説明して欲しい。村の荒廃のところで結果がわかったが、この2つのジオラマが藩政をささえたものたちをはさまず、同じところにあつたらもっと直接的に流れがわかったのではないか。

(上記のほか、昭和58年度における第1展示室の反応調査の全ては、当時の解説員・太田めぐみ、大泉智子、戸島登喜子、秋山真理子、南都薫子、佐藤喜美子によって行われたものである。)